
亡国の幻将

モアイ・イースター・タヌキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国の幻将

【Nコード】

N0693X

【作者名】

モアイ・イースター・タヌキ

【あらすじ】

高二病と大二病を併発した作者が鬱屈とした日々の中で書いたファンタジーな小説です。

古代中世風の異世界を舞台にして、登場人物たちが馬に乗ったり、剣を振ったり、矢を撃ったり、本を読んだり、相撲をとったり。

1・戦場後地にて

> i 3 1 9 4 5 — 4 0 5 7 <

見渡す限りの屍しかばねの群れ。青々とした草原に横たわる死体には、もうピクリとも動く様子はないけれど、ついさっきまで、ほんのついさっきまで、魂が宿っていたのだ。命がほとばしっていたのだ。

その風景を見ていたのは、夏の晴れ空のような、はっきりとした青色の瞳だった。彼は…… シャンティは自分のすぐ足もとにも転がっている死体を踏みつけないように、下を向きながら、とぼとぼと歩いた。

そよ風が彼の豊かな金髪とマントを揺らし、同時に血から発せられる鉄の臭いを彼の鼻に運んだ。息を吸う際にその匂いを嗅いだ彼は一層気が滅入ったかのようにがっくりと肩を落とした。下を向いていたので、彼には空の色はわからなかったが、きつとこの状況にはおおよそ、うってつけとは言えない晴天が広がっているのだ、と彼は思った。

「こっちはカバルス同盟国兵」ふと目についた死体を見つめながらそう呟いて、すぐ隣を見た。そこにも死体が寝転がっている。「こっちは我らがサウルス兵だ」

シャンティはくだらない、と言うように目を瞑つむって、下唇を噛みしめながら首を振った。そんなことをしても、目を開けばまた同じ光景が広がっているのは彼にも分かっていた。

十九歳にもなつて、こんなちゃっちな現実逃避だなんて、我ながらみつともない。自分の行動を卑下しながらも、彼の目は閉じられたままだった。それはどこことなく祈りにも似ている。

「シャンティ！」不意に怒号が響いた。シャンティはびっくりして声の方を見た。そっちには、青色の瞳、長い金髪、つまりシャンティとほとんど同じ顔の青年が、すらりとした馬に乗ってムスツとし

た顔で立っていた。シャンティと相手、両者の端的な違いは髪の長さ・目の吊りあがり方だけだ。馬上の青年には多くの騎兵が付き従っており、彼ら騎兵は自分の主である青年を中心にして堅固な感じで彼を守っていた。「近衛兵団はどうした？ 馬は？ なぜ、一人でうろついてる？」

「ジニー、そんなに怒るよなことじゃないよ。なにせ、もう戦争は終わったんだから。それでね、さっきの質問だけど……近衛兵団には死体に群がるカラスを追い払うように頼んだんだ。馬は……」といった後、シャンティは少し困ったように小高い丘の上に目をやった。そこには大きな白馬とその馬の手綱を掴んでいる男がいた。白馬はどうも男の手に負えないようで、後ろ足を蹴りあげたり頭を激しくがくがく振りまわしたりして、男を困らせている。「あの子だからね」

ジニーと呼ばれた彼は、本名をジャーニイという。シャンティの双子の兄でもある。彼は不機嫌そうな顔を丘の上に向けると、すぐさまシャンティに視線を戻して、また怒鳴り声をあげた。

「あんなくだらない馬はさっさと捨てる。それに、お前、近衛兵団つてのがどういう組織なのかわかってるのか？ 近衛兵団はおれたち王族を守るための組織だ」厳密に言えば国家元首を守る組織が近衛であり、その他は親衛という言葉を使うべきであるが、彼らの国ではそれを分けない。「お前はそれを、死体なんかの、それもカバールの死体なんかを守るために使うなんて……。おい、これから先はどんなことがあっても自分の身辺から近衛兵団を遠ざけるな。お前は……」

ジャーニイが小言を言いだすとシャンティは困ったような笑みを返した。

「どんなことがあっても……とは言っけどねえ、ジニー」シャンティは同じ表情のまま、この陰惨たる草原のどこかの虚空に目を移した。「なにも起こりはしないさ。なにせ、すべてはもう終わったあと……だろ？」

「……」ジャーニイは呆れたという感じの顔をシャンティに向けて、それでも彼の抱いた無常感と同じようなものを自分の胸にも感じつつ言った。「カバルスの王族や軍人、職民議員との講和が成立すれば、ひとまずは決着さ。けれどもな、シャンティ。終わったのは全てじゃない。今回の戦争が終わったに過ぎない。それだけに過ぎない。そうだ！ 父上はまだ征服を止めはしない、版図の拡大を終わらせはしない、さらなる国の繁栄を諦めはしない。この戦争が終わっても、またすぐに次の戦争だ。それも全て国のためだ、国民のためだ。馬鹿みたいに本ばかり読んでいるお前なら、わかってるはずだろう、シャンティ？ そして父上の息子であるおれたちは次の戦争にも参加せねばならない。誇り高く、なおかつ、民に畏怖・畏敬される王族として……次世代の王の候補として」

「そうだね……」視線を虚空から兄に移してシャンティは言った。

「そんな、おおよそ崇高で誉れ高い大義名分……全く持つて、糞くらえだけれども、それでも戦わなくちゃならないのは事実だ」

ジャーニイはシャンティのすぐ近くまで寄ってきて、馬の上から手を伸ばした。ジャーニイが近くの兵士に「おれの馬に乗せる。手伝ってやれ」と言うと、一人の近衛兵が馬を下りてシャンティの足を持ち上げた。

この時代にはまだ鎧が発明されておらず、乗るのにも人の手を借りなければならぬ。この鎧がないばかりに、この時代に騎乗には色々な弊害が発生していた。が、話からそれるので詳しくは話さない。

で、シャンティがジャーニイの馬の背中に乗り終えると、ちょうどある知らせが届いた。知らせを届けたのはシャンティの忠実な側仕え、つまりは侍従であり、さらにはシャンティの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある頬髭びつりのウィス力だった。

「ジャーニイ様、シャンティ様」

ウィス力は少し慌てた様子で馬を走らせてきた。

「ウイスカ、どうしたんだい？」シャンティが身を乗り出して聞く。馬上が不安定になって、ジャーニイはちょっとシャンティを怒った。怒りはシャンティだけでなく、近衛兵団の隊長の身分でありながら自分の主のもとを離れたウイスカにも及ぶ。「ああ、もう。はいはい、わかったよ。小言なら後で聞くから。それよりも、今回は先にウイスカの話しを聞こう。で、ウイスカ？」

要件は？

「はい。実は、つい先ほど私の息子が、ここから少し離れた所で二人のカバルス人を見つけまして、その片方が軍人でございます。で、もう片方が、少し衣類が汚れておりますが、私が見た感じではおそらく……カバルスの王族かと思われます」

シャンティとジャーニイは目を丸くして見合わせた。目が合うと同時に頷きあつて、すぐに現場に案内するようにウイスカに頼んだ。「はっ、こちらでございます」

ウイスカは馬の腹を蹴りながら、手綱を引く。自分の体の一部のように馬をひよいと操って、目的地の方向に翻る。彼はシャンティたちに目配せして、もう一度馬の腹を蹴った。目的に向けて走りだした彼の後を追ってシャンティとジャーニイ、そして彼の近衛兵団も馬の腹を蹴って駆けだす。

一行は障害物のように死体が散乱する草原を走った。ウイスカを追いかけて始めてしばらくすると、シャンティはそこいら中からぼきぼき、と軽快な音がするのに気がついた。ちらりと下を向いてみると、ジャーニイ含む、全ての騎兵が死体の骨を遠慮もなく踏みならしている音だと知った。

シャンティは肝を冷やし、大声で「止まれ」の声を発したが、ほとんど間をおかずにジャーニイは「いや、止まるな」の声を発した。近衛兵たちは自分たちの主であるジャーニイの命令通り馬を走らせ続けていたが、やはり、少し困惑した表情を浮かべた。近衛兵団の中にいたジャーニイの侍従であり、さらにはジャーニイの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある顎鬚びっしりのベアード

は、私は慣れたものだ、と言う感じに苦笑を浮かべていた。

ついでの話だけれど、シャンティとジャーニイの両従者は共にバルムという姓であるが、二人に血縁関係はない。

そうこうしているうちにシャンティとジャーニイの喧嘩が始まっていた。

「ジ、ジニー。何をやっているのかわかっているのか？ ジニー、彼らは」と、シャンティは顔を真っ青にしながら死体を指さした。

「彼らは終戦が決まると同時に、カバルスの人たちによって回収され、それぞれがそれぞれの家族の下に戻って行くんだ。それなのに」

「うるさい、今はそれどころじゃない。だいたい、カバルスの兵隊など」

「カバルス人だけじゃなくて、サウルス人も踏んでるよ、君は」

「それならば、死体などを気遣ってそろりそろりと歩けというのか？ ふざけるな！ この数の騎兵がそんなことをしてみる、王家の誉れも一瞬にして地に落ちるわ！」

「誉れ？ ああ、我が兄にしてなんとも愚かなで浅慮な発言だ！

何が誉れだ。自尊心、自尊心の間違いだろう？」

「愚かで浅慮？ まるで、自分の頭脳は賢しく明晰であるような言い方だがな、お前なんぞは本の読み過ぎで、いつまでたってもお子様な幻想から抜け出せない精神未熟者じゃないか！」

「ああ！ 君、ぼくならまだしも、偉大なる先人たちの残した金言や知識、知恵、思想をも侮辱するなんて……暴言だ、それは暴言だぞ。頼むから取り消してくれ、そうじゃないと後ろから……」

「御二方、つきましたぞ！」二人の喧嘩を仲裁したのはシャンティの侍従ウィスカだった。

二人は一旦休戦ということにして、本来の目的である戦場後に迷い込んだカバルス人の方に集中することにした。

二人のカバルス人の姿は馬の上からでは見えなかった。なぜならカバルス人がいるであろう所にはシャンティの近衛兵団が群がって

いたからだ。シャンティが「開けてくれないか？」と優しげに命令すると、彼を主と認める近衛兵団は左右に開いて道を作った。

道の奥にはカバルス軍の軍装をつけた大きな体の男がいて、その大きな背中にいる、フードをかぶった小柄な人を隠すように胸を張って立っていた。

彼の髪は白髪交じりの黒い髪、短く切りそろえられたそれはツンツンにとんがっている。目は黒く、鋭く、多くの敵兵に囲まれているのに、その瞳のどこにも恐怖心は見えなかった。右手にはカバルス地方特有の形をなした剣が握られ、その切っ先は地面に向けられている。口元は、口角が上がっている。微笑んでいるようだった。髪のにこそ白髪は交じっているが、彼自身の体つきは若者のそれである。

シャンティが応対すべく馬を下りると、ジャーニイもなんとなく下りた。本来ならば、敗北国の敵兵を相手にするのだから礼儀を欠こうがどうでもいいはずで、馬の上からでもよかったわけだが、シャンティがあまりにも当たり前のように馬を下りるのでジャーニイも下りてしまった。ジャーニイは地面に足をつけた瞬間、周りの近衛兵団がちよつとざわつくのを見て、自分がつまらないことをしたと気がつき、何となく恥ずかしく思った。とりあえずシャンティを恨むことにした。

シャンティはそんなジャーニイの想いも知らないで、彼の方を向くと小さな声で「ぼくが応対するよ」と微笑みかけた。ジャーニイは敵わないという感じに「どうぞ」と手を指示す。もともと、ジャーニイは言語学が苦手であり、カバルス語もそれほど習熟してはいなかったもので、始めから応対などをするつもりもなかったわけだけれど。

満面の笑みを浮かべてカバルス人の方に振り返ると、シャンティは流暢なカバルス語で挨拶し始めた。

「はじめまして！　ぼくはサウルス地方を治める王族レジエム、の現王シユラクの三男であるシャンティと言います」彼はそれでも無

表情なカバルス人の方へ、彼も恐怖を感じていないかのように歩きます。「いいえ、警戒しないでください。ぼくたちはあなたたちに危害を加えたり、辱めを与えたりは、一切しません。だから、まずその手に握っている剣を離してはいただけないでしょうか？」

シャンティがそこまで言っても通じていないのか、カバルス人は剣を離そうとはしなかった。シャンティは無言のまま彼を見つめ続けた。辺りに重苦しい空気が漂い始める。特に、シャンティの近衛兵団は相手の一挙手一投足を食い入るように見つめていた。彼らのその行動は、シャンティにもしものことがあると自分たちは自害せねばならない、という恐怖から来ている。けれども、もちろんそれだけではない。勤労の一番の理由を上げるならば、この優しく聡明で誰にも分け隔てない王子への愛情こそが、それだと言えるだろう。

カバルス人は沈黙を保ったまま、剣を持ちあげた。近衛兵団が一斉に構え、誰かがシャンティの服を掴んだ。カバルス人は嘲笑のような表情を少し浮かべて、空いている方の手で、自分の剣をつんとつついた。彼は流暢なサウルス語でしゃべった。

「お前の兵士たちが一人残らず剣を地面に捨ててくれるなら、おれも捨ててやる」

「よし、そうしよう」シャンティは間髪いれずに答えを返した。「みんな、剣を地面においてくれ」

兵士たちは啞然としていた。そんな彼と長年連れ添った従者ウィスカも、さすがに何か口を挟もうとしたが、それをするまでもなくジャーニーが怒鳴り声をあげた。

「何が、剣を地面においてくれ、だ。シャンティ、それは勝利国の王族であるおれたちがすることではない」ジャーニーは兵士たちの間を縫いながらシャンティのもとにやってきて、カバルス人の方を睨みつけながら続く言葉を言った。「蛮族の軍人よ。どうやら、お前はサウルス語に通じているみたいだから、この蛮族の地では知識人のようだ。しかしその識者もこの世の道理には通じていないらしい。これから我が高貴なるサウルス国の一州の、その一員とな

るお前に、このおれが直々にこの世の道理というものを教授してやるわ」

そう言うとジャーニイは自分の近衛兵団の方へ向いて命令を発した。

「我が身を守る近衛兵たちよ、我が戦友たちよ、剣を……」そこまですぐの瞬間、ジャーニイの右頬に衝撃が走って、次の瞬間には地面に伏していた。眼前に広がる蒼天を見て、ジャーニイは瞬時に、しまった、敵に先手を取られてしまった、と感じた。

しかしそうではなかった。カバルス人はさっきのポーズからちよつとも動いてはいない。けれども、さっきまでとは違い、顔には少しばかりの驚きの表情が見えた。

「すまない」カバルス人に対してそう言ったシャンティの左の掌はさっきまで、ジャーニイの顔があった所に突き出されていた。ここまですぐ後は言わずもがな。ジャーニイを突き倒したのはシャンティである。「彼はぼくの兄でね、弟想いなのはいいけれども、激情家なのが玉に傷だ。まあ、何もなかったと思ってくれれば、それで万事オーケー。よし、それじゃあ、みんな……」

シャンティが屈託のない笑顔で振り向くと、近衛兵団も、仕方がない、と言う風に苦笑を浮かべて地面に剣を置いた。

「待て、待て待て」ジャーニイは顔を真っ赤にして立ちあがった。マントについた土を払い、胸に手を当てて息を落ち着け、準備が整うとカバルス人を指さして例のごとく怒鳴りを上げた。「なんで、そんなことをする。おれを地面に押し倒してまで、なぜ蛮族の言うことを聞く。シャンティ？ おれたちは勝利者だぞ、奴らは敗北者だ。これから奴らの国を潰し、奴らを我らの配下となす。そうなれば奴らの全ての生殺与奪の権利はおれたちにあり、人種として高みにあるのはサウルス人だと、証明せしめて、遥かなる歴史の上にも、既成事実然とそれを刻みつける。そんなおれたちが、なぜ……考えても見ろ、奴のあの態度は侮辱罪だぞ。違うか？ どうだ？」

「ぜんぜん違うね。というか、君の言葉は全くもって聞くに堪えない

い。人種としての高み？ 人種間に高低なんかあるのかい？ ぼくは聞いたことはないぞ。あつたとしても、それがいつわかった。いつだ？ もしかして、今回の戦争でそれが証明されたとでも？ 馬鹿言っちゃあいけない。今回の戦争ではそんなつまらない証明なんてされていない。我々サウルス軍が我々の兵数の三分の一ほどの兵数しかもたないカバルス軍から大損害を受けながらも、なんとか辛勝をもぎ取った……今回の戦争は、その事実しか生んじやいない。人種の優劣など……」

「王族の誇りを！」ジャーニイはシャンティの片手で胸倉をつかむと、さっきの逆襲とばかりに空いている方の手でビンタを打った。

「注入してやる！」

「なにが！」シャンティは胸倉を掴んでいる方に噛みつきながら叫んだ。「誇りだ！」

歴史だなんだ、証明だなんだ、優劣だなんだ、誇りだなんだ、と口走ってはいるものの、それは結局のところ、みつともない兄弟喧嘩でしかなかった。彼らは臆面も恥も外聞もなく、自分を育てた従者の前で、自分を主と認める兵士の前で、はつきりとした身分もわからない異邦人の前で、世にも低俗で微笑ましい戦争をおっはじめた。

「お、王子を」ウイスカとベアードの両従者があたふたしながら兵士に命令した。「王子たちを止める」

上司の声にハツとして、「おお、そうだ。止めなきゃあ」と我に返った近衛兵たちがわらわらと王子たちに取りつき始めると喧嘩は強制的に収まった。けれども当の本人たちはまだやり足りないようで、顔を張らして、一方は泣きじゃくりながら、一方は癪癪を起しながら相手を睨みつけていた。

不意に、地面に金属の落ちる音がした。

「姫」

と、握っていた剣をはたき落とされたカバルス人は、さっきまで自分の後ろに身を潜めていた女性を見つめながら言った。

シャンティは、そのとき初めて、そのカバルス人の瞳に何らかの光が宿ったのを見た。

「ギャロップ、もういいわ。あの方たちは私たちに害を与えるような方々ではないし、それに……」カバルス人の女性は思慮深そうなそれでいて優しい表情を相手に向けて言った。「ええ、もういいの。うん、ここまで……楽しかった」

それに彼女は美しかった。

一人、とある理由から彼女の虜にならなかったシャンティは周りを見渡した。若い兵士も、古参の兵士も、ジャーニイも、誰もが皆、その女性の美しさに見とれていた。息をのんで、目をいっぱいに広げ、頭をからっぽにして、彼女の全てを、自分の頭の中にあるキャンパスに収めようとしているみたいだった。なるほど、衣類をいくらか代えたとしても、日々の生活で身についたその人間の持つ高貴さと言つものはそうそう隠せるものではない。ギャロップと呼ばれた男の顔を見る彼女の顔は、名状しがたい究極さ、と言つものを表わしているようにも思えた。

彼女は熱を持った目でひとしきりギャロップを見つめた後、そつと流れるように目をそらした。ほとんどすべての人々は彼女の仕草だけをつぶさに観察していたが、シャンティだけはギャロップを見ていた。そして、彼は、何十人の兵士たちに剣を突き付けられてもひるみもしなかった軍人ギャロップの何かが崩れるのを見てとった。膨大な数の日記や著作を後世に残したこの筆まめ王子シャンティは、ある日の日記の中にこのような記述をしている。

『ヒツパリオン・ユルシュ……亡国の幻将ギャロップが、戦争のほか唯一愛した者』と。

カバルス人の二人がジャーニイとシャンティの双子の王子に保護されてすぐに、サウルス国とカバルス同盟国間の講和が結ばれた由の報告が知らされた。

この講和の後、カバルス地方に多く存在する部族の内、その大半

の部族を治めカバルス地方の盟主として存在していたカバルス同盟国は独立国としての機能を失うことが決まった。カバルス同盟国はそのとき持っていた領土を全てサウルス国のものとすると同時に、サウルス国の一地域となる。

1・戦場後地にて（後書き）

読みにくいのもご愛嬌、と言つことでもよろしくお願いいたします。

2・サウルス国史

> i 3 1 9 5 3 — 4 0 5 7 <

この時代の数少ない大国であるサウルス国も、誕生した当初は小さな都市でしかなく、また、侵略や征服を繰り返して領土を拡大するような、ある種の病にも似た性質を持ち合わせてはいなかった。

小都市サウルスのあったコミッセオ地方は多種多様な文化の交わる地で、緩衝地帯とも言えるようなあやふやな地域だった。それは特殊な立地に端を発している。

そのコミッセオ地方より遙か遙か東にはウアズマ地方と呼ばれる華々しい文化を持った地域があった。絨毯などの毛織物や、金細工、農耕法、薬学、戦争学、思想……多くの物が生み出され、それは高い山や灼熱の砂漠や流れの急な川や深く険しい森を越えて、さらにコミッセオ地方のすぐ東の、常時民族間で戦争を起こしあっている蛮族の地・小ウアズマ地方を越えてやっと西のコミッセオに伝えられた。

> i 3 1 9 5 4 — 4 0 5 7 <

そのコミッセオ地方と小ウアズマ地方を陸路で結ぶ道は呆れるほどに少ない。と言うよりもほぼ一本しかない。通称 竜の鼻の穴と呼ばれる一本道は、南北の海がこの二つの地方を切り離そうとするように、ぐくぐつと陸地に食い込んでいて生きている。その一本道もそうたやすく踏破できるようなものではなく、大集団での移動が困難なので、その時代の後進地方であったコミッセオは他の蛮族たちからの侵略を受けないで済んだ。

コミッセオの北には優れた建築技術と教育制度、さらには解剖学、地図学の知識を持つモーキリニア地方がある。さらに言えばその北には偉大なる遠征王が築いた国があったがこれはあまり関係ない。それで話を戻すが、コミッセオとモーキリニアを結ぶのも海によって自然に作られた一本道で、これはコミッセオの北西にある。し

かし、この一本道はそれほど険しくはなく、たびたび北からの侵略を受けていたので、コミッセオの北部に栄えていた王国カンプトケファレは防衛を容易にするために海をつなげて小さな川を作った。

潮の川 と呼ばれるこの防衛線はうまく機能した。

西には、からりとした風土のカバルス地方があった。騎馬技術と牧畜の知恵が蓄積されており、草原の多さなどから良馬の産地としても知られている。コミッセオとカバルスをつなぐ道はいくらもあるが、世界地図を見ると、やはり海によって陸地がきゅっとすぼまっているように見える。

つまるところ、コミッセオ地方は訪れるための通路の小ささと少なさから他地方からの侵略を受けにくい性質を持っていたのだ。そして文化と知識を有した人間の往来は何とかできるせいか、各地の文化が入り混じったあやふやな特色を持つことになる。

もう一度地図で見てみる。少しすれば気が付くが、コミッセオ地方は竜の頭のような面白い形をしており、前述の 竜の鼻の穴 と言う一本道も、ちょうど竜の鼻に見える辺りに道があるから称されたものである。この地方は地図技術の進化した中世にはその形から竜頭地方とも呼ばれ、豊かな文化の発信地に成長していた。

さて、話を小都市サウルスに戻す。

小都市サウルスは聖獣信仰せつぐわいのしんぎょうの対象を竜としている小都市で、コミッセオ地方の中心近くに存在していた。その立地のせいかコミッセオ内に存立する数国からたびたび略奪を受けたり、国同士の戦争の宿营地などとして都市の宿舎と食料を差し出すことを強要されたりした。

サウルスの長であったサウルス・ジャクナー世はその状況を打破するために富みを蓄え、兵士を鍛え、他国との戦争より疲弊していたコミッセオ南部グナトウス王国に侵攻した。一三二年の冬のことである。

彼らが掲げた旗は深紅に染め抜かれた布に竜の紋様もんようが金糸で縫い

付けられていた。それを見た兵士隊は自分たちが聖獣に守られているのだと確信した。団結力高き彼ら歩兵の密集隊形によりグナトウスは瞬く間に落とされた。ジャクナ一世はグナトウス王族と貴族を抹殺し、代わりに自分の親族を領主とした。ジャクナ一世は誉れある歩兵部隊と共に小都市サウルスに凱旋し、市民に歓呼と（冬の時節にどうやって手に入れたのか）花吹雪で迎えられた。さらに新王国サウルス建国の由をコミッセオ内の各王国に到達する。グナトウスはサウルス国南部グナトウス地域と呼ばれることになる。

さて、地味豊かな南部の土地を手にしたことで彼らの国力は大きく増大したが、ジャクナ一世の親族はグナトウスの統治に失敗。グナトウスの民衆は暴徒と化した。一三七年、ジャクナ一世は嫡男のジャクナ二世を派遣し、彼はまだ若いにもかかわらず、父の期待にこたえてその翌年に暴動を治める。

ジャクナ一世の執った「前支配者の血筋の抹消」という行動は後世に書かれた「君主論」にしてみれば満点を与えられるものだった。しかし、この時グナトウスの鎮定にあたったジャクナ二世は「今回の南部暴動は、元からいた支配者を全て殺してしまったせいだ」と考え、これを何らかの書物に記録しているが、何に記録したのかはわからない。けれどもこれが後のサウルス国の領地支配方法の確立につながる。

ジャクナ二世が南部を平穏に治めているのを見た父ジャクナ一世は彼に王位を譲ることを決意し、ジャクナ二世は一四三年に戴冠を果たした。

ジャクナ二世はグナトウスを気に掛けながらサウルス国をうまく統治していくが、コミッセオ北部の王国カンプトケファレからのたびたびの侵攻には辟易していたようだった。

他国からの侵略行為に頭を悩ます父を見て育ったシハルクは「豊かな国力を持つ国は他国からの侵略の的にされやすい」という事実を知る。同時に「自国の平和を維持するために他国との戦争を辞さない」という彼の、否や、サウルス国の理念を確立した。

シハルクは後のことを考え早くから軍隊の育成に努めていた。中でも、戦争に際して自分の周りにいて自分を守り、時には自分の命令を忠実に聞き、その通りに戦争をコントロールする心身ともに屈強な精鋭兵団の育成を重視した。これは後の近衛兵団の走りである。彼は一七一年の王位継承の戴冠式の後、すぐに北部に進攻しようとし始めた。

が、過去の南部鎮定の際にグナトウス民に色々な優遇を与え、その後も民に尽くしてくれた名君ジャクナ二世の引退と共に、南部民の間に次王への不安感が強まってくる。それはすぐに広がって南部グナトウスではまたしても反乱が起こった。彼はまず、その鎮定をしなければならなかった。サウルス軍とグナトウス反乱軍の間で一度の会戦が行われた。この時の戦況はコミッセオ地方の他の二国のスパイによって各々の国に伝えられ、その内容を聞いた二国の王族は戦々恐々とした。それほどにサウルス軍の力はすさまじかったのだ。

南部鎮定後すぐに北部に向かったシハルクはじわじわとカンプトケファレ国を侵略していった。カンプトケファレはこの侵攻を予期しており（サウルスが小都市だった頃、彼らを一番いじめていたのが南部の国グナトウスと北部の国カンプトケファレだったから）、国内のいたるところに防備軍を敷いていたが、それでもサウルス軍の猛攻は止められなかった。

シハルクとサウルス軍はついにカンプトケファレの王都ウチノホークをぐるりと囲い、攻城戦を開始。数日後には陥落せしめ、シハルクは兵たちに二日の略奪を許すとともに、カンプトケファレとの「講和」を結んだ。

シハルクは前述したジャクナ二世の考えを残したメモをすでに読んでおり、カンプトケファレ国の王族を民衆の前ですぐに斬首するようなことはなかった。しかし、彼はカンプトケファレ王族を殺す。ただ、その行為に対して、カンプトケファレ民に王族殺しを認めさせる、ある程度の正当性を求めている。

彼はまず自国の法廷にカンプトケファレ王族を呼びよせ、そこで今回の戦争の責任としての処刑を要求し、当たり前だが、これが法廷によって認められる。シハルクは法律の上でカンプトケファレ王族と今回の戦争に加わった上級將軍たちを戦争犯罪人として処罰することを発表した。同時に、カンプトケファレ内の親サウルス派の貴族を「サウルス国北部カンプトケファレ地域監督者」として取立て、その上にフィクサーのような立場としてサウルス王族を「カンプトケファレ総督」と言う役職で置いた。これが功を奏してくるとシハルクは南部にも同じ処置を施そうとするが、南部は王族だけでなく、その他の貴族も全て殺されていたせいで実施できなかった。それでも一部の北部市民の不安は収まらず、シハルクが北部市民の保護を法律として公布すると、市民はやつと彼らを新たな支配者と認め始めた。

シハルクは国内で大きな裁判が起こった時は自ら出向き、公正なしかし、ややサウルス側よりの判定を下した。それでも、この時代においては他の裁判官と比べ相対的に公正な裁判を行っていたせい、彼は後に「法務王」と冠されることもある。

北部の治安が穏やかになり始めた一七四年の夏頃、シハルクはまだ幼い息子たちを書記などの役職で従軍させコミッセオ東部を支配していたヘドロケラス王国に侵攻し、またた瞬まく間にこれを成功させる。ヘドロケラスの統治にも今までと同じ方法を取り、この国をサウルス国の一部とした由をコミッセオ地方全域に公布した。つまりは、サウルス国はコミッセオ地方を平らげたわけである。

この事実に関心を示した彼は「コミッセオ地方をサウルス地方と称するように」との書簡を小ウアズマ、モーキリニア、北の王国群カバルスの各地方に送った。これより先、現在に至るまで元コミッセオだったこの地方はサウルス地方と呼ばれることになる。

サウルス地方を併呑し、サウルス地方各地域の平和を維持し始める政策を施し始めると、シハルクの自由な時間は格段に増えた。そうなるにつまらないことを考えてしまうのが人の常である。

「……各国から考えて私たちの都は、サウルス地方のサウルス国の中央部の王都サウルスとなる」シハルクは何となくそれが嫌だった。「新しく決めた名前に関する法律では、公で名乗るとき出身地域名、出身町村名、家名、そして自分の名前を順々に言うことになっている。となると、私の名前は……サウルス・サウルス・サウルス・シハルクとなる」

大体、サウルスと言う名前はサウルスの王族の身が使えたものであったはずが、新しい法律では、出身地によつては一般人にも使われるようになる。そうになると、サウルスの名前も羨望のまなざしでは見られなくなるのだ。

「まあ……しかし、サウルスの名が庶民に溶け込むいい機会かもしれない」

シハルクは簡単にその不満を投げ出して、次には「いつそ、自分の名前をサウルスにし、サウルス・サウルス・サウルス・サウルスとして箔をつけようかしらん」とも思ったが、子供たちが何となく居た堪れなくなってやめた。彼の名前に関する葛藤は息子たちへの手紙の中で書かれており、この話は中世に「シハルク王の葛藤」と言う名の喜劇として発表された。

話しを戻す。それで結局、彼は他を変えることにした。

まず、王都をその時より少し北に建設し始め、そこを新王都「センチュリオン」とした。これで彼の名前はサウルス・センチュリオン・サウルス・シハルクとなった。

こうなると間に挟まれたサウルスがみずばらしい。彼は新しい家名を考えることにした。サウルスと言う家名を捨てるのは先人への無礼に当たるかもしれないとは感じたが、最初にサウルスがあるので、その時感じたことには目をつぶることにした。

彼は、王の意味がある「レジエム」を家名にすることに決め、これでサウルス・センチュリオン・レジエム・シハルクの名前が出来上がった。

一八〇年から建設を開始したセンチュリオンは一八九年に完成。

少し長くなつたが、サウルス国の基盤はこのように出来上がったことになる。

シハルクの次の王がシャンティたちの父親であるシュラクであつた。ライオンの鬣たてがみのような、金髪でばさばさの髪の毛と髭ひげを持つた彼は、シハルクが東部ヘドロケラス国を攻めた時に、些細な役職で従軍した三人の息子の末弟であつた。

彼はその後、各地の小さな反乱などを素早く鎮定した武功や軍内で高まつた名声によつてシハルクから次王に選出される。次王に選出された時、彼はすでに三十歳を越えていた。

一九八年、シュラク三十二歳の春。戴冠と共に彼はサウルス地方を飛び出した。二人の兄や先祖の育てた兵隊たちと共に東へ向かい、竜の鼻の穴の一本道を通り小ウアズマ地方に侵略を開始した。

まだ小部族同士で交戦していた時代の小ウアズマ兵などはサウルス軍の敵にならなかつた。サウルス軍は、まるで足元の小石を蹴飛ばすように小ウアズマ兵を撃退していった。

どんどん小ウアズマの奥地へ進んでいったが、それがまづかつた。勝手知らぬ奥地に踏み込み過ぎ、さらに、完全に支配したと思つた部族の反乱からサウルス軍の補給線は分断された。彼らは現地調達により何とか食いつなごうとし、少数単で各地の村を荒らしまわつたが、それもいけなかつた。各地の村の戦士たちは珍しく手を取り合つて自警団を組み、地の利を生かしたゲリラ作戦に出た。

サウルス軍は苦境に立たされた。雨が常時しとすと降る小ウアズマでは、大勢で固まっていると糞尿の始末などのせいで衛生状態は急激に悪くなる。食料部族のせいで十分な栄養を取れず、一度病が発生するとその感染拡大を止める術もなかつた。

二〇三年。五年にも及ぶ遠征の末、ついにシュラク王はサウルス地方への撤退を決意。サウルス軍はゲリラに応戦しながら何とか竜の鼻の穴を通つたが彼の二人の兄はすでに死んでいた。これに関して、現代の歴史研究家は『シュラクは目の上のたんこぶで、さらに

は近未来的に脅威にもなりうる二人の兄をこの逃亡劇の最中に殺した。なぜなら、まとまりのない蛮族相手にこのような大敗を喫してしまったのだから、帰った際には兄への譲位を求められる危険性が出てくるからである。現に、軍部内ではすでに二人の兄を取り巻く派閥が出来上がっていた』と記述している。この記述の正誤はわからないが、事実としてサウルス軍は初めての敗北を喫してしまった。シュラクはサウルス国に戻ると、反乱が起こらないように気を配った。まず竜の鼻の穴に大きな砦を設け、小ウアズマの蛮族が侵攻してこないようにして、国内の不安を和らげた。さらに各地域を親善訪問し、「この先十数年は他国・他地方への侵略を行うことをせず、国内のさらなる発展に取り組むことを約束する」と演説してまわった。

そんな二〇四年頃、シュラクは三十八歳にして初めての子供を手に入れた。燃えるような赤色の毛を生やした男の子であった。彼はジャクナ三世と名付けられ、シュラクは隠されていた親馬鹿の才を発揮して彼を可愛がった。その二年後には他の妃との間に双子の男の子が生まれる。兄の方がジャーニィで弟がシャンティである。王位継承権第一位はジャクナ三世。第二位はジャーニィ。第三位はシャンティとされた。この後もシュラクは数人子供を作った。

二二四年、嫡男ジャクナが二十歳になったに際し、西のカバルス地方への侵攻を開始する。小ウアズマとの戦さに使う馬を求めての行動である。そして、その遠征にはジャクナ王子と双子の王子も將軍として参加することになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693x/>

亡国の幻将

2011年9月26日20時31分発行